

「祇園を愛した先人たち」

(鼎会 2 月例会講演より)

(講演主旨)

祇園新橋は江戸時代前期以降、織維町衆に依って繁栄してきた花街である。就中室町友禅衆と墨客との交流に新橋は賑わった。

経済支援と東山の環境文化に恵まれた祇園は舞曲や女紅場などを通じて他の花街には見られない品性と知性の街風が築かれてきた。この環境を求めた白川衆 (都詰駐在武士や、明治以降この大名屋敷に代わった国公立諸校の若者) が白川の流りに沿って新橋に通った。

明治以降 茶屋「大友」の文芸藝妓 磯田多佳を中心に文化人、新町衆が集い新生祇園は興る。祇園は「かにかくに祭」を通じて多佳女を顕彰するが有名文化人の影に多佳女が最も親しく交わった浅井忠、室町町衆、母校高等工芸の先人達との思いが薄れてゆくことを残念に思う。

友禅は酒造と並んで近代流通を興した産業として昨今の史観は変わってきた。また西陣に就いては幕府支援下に巨大な利潤を得たが、時代に追随する再投資を成し得ない俛に衰退を招いた。大阪産地とは対照的である。花街や祭りへの過度なる支援や大名金融の失敗が再生への機会を失った。

(色染 昭 2 8 ・西川 三郎)

(注 記)

「鼎会」は染色業界に活躍された方々で構成され、母校色染科同窓生が大部分を占めております。会員数は 3 0 名で 2 ヶ月毎に例会 (講演及び懇親会) を開催しています。

色染物質会各位のご参加を願って当稿をご送付させて頂きました。

なお当会の会長は 2 8 年卒の稲井新郎さん、事務局長は 3 4 年卒の横山清一郎さんです。

(事務局)

(講演レジメ)

1. 祇園の特性

環境

貴賤混在の東山文化。維新の舞台裏。(山中社寺は桃山文化。山麓は洛中火災毎の難民。明治末、東山路貫通で賤民街改善)

支援者

新町衆(友禅・室町の衆。祇園祭)、文人墨客、知恩院の参詣客。

運営

甲部・乙部分離。奉仕と質素儉約の精神が、町風となる。

舞芸、女紅場が、品性と知性を高揚させ、童歌創作の気風を生む。

検番諸策(募集、里子制、施療、身分制、諸契約、待合自立など)に卓越の成果を出す。

2. 町衆と花街

江戸時代の洛中人口は20～30万人。内、この四分の一が西陣、四分の一が花街関係であり、相互密接に関わる。

旧町衆(西陣系商流通)

江戸初期、幕府は西陣系商に絹糸割符権を与え、西陣・幕府共に巨利を得る。

一方、1730年の西陣大火や幕末の糸値高騰、大名貸金倒れは西陣を沈滞させた。

新興の大阪流通は、肥大硬直した西陣を敬遠した。糸商流通の波瀾は、島原と上七軒にも波及することとなった。

新町衆(友禅・縮緬/室町流通)

江戸中期に相次いで始動する。この流通が西陣や洛中経済の下落を支える。

また、新町衆は大阪流通に迎合され、やがてこれが明治以降の京都の新繊維産業につながっていった。

新町衆は、洛東の墨客と祇園に交じりながら、祇園に繁栄を齎した。

ただ、新町衆の過度な浪費(祇園祭など)は、大阪流通の独占の機会を逸し、他産地の林立を許すことになった。

注1.

酒造業、友禅 / 室町の新流通制度(問屋と職人G協議制)は、旧来の産業形態(問屋職人)を離れて新しい流通を生んだ、初期のマニュファクチュアリングである。この時期(18世紀、8代将軍吉宗)に蘭学導入と医薬事業の国産化もあり、近年の歴史観において、この時期が近代の始動として評価されている。(旧来の歴史観においては、ペリー来航時(19世紀)を指す。近代は明朝の崩壊に依る近隣国の自立とも云われる)

注2.

都市文化経済の推移

17～18世紀前半の京都（伝統産業） 18世紀後半の大阪（物流） 19世紀の江戸（消費）

3．祇園史

平安・鎌倉

白拍子（貴族）、辰巳遊郭（賤民）

八坂参詣客を水茶屋が迎える。祇園村と称す。

江戸初期

洛中に四条河原に過度の田楽、芝居繁盛の一方風俗問題の対応もあり、8新地1芝居通りが設置される。縄手茶屋が公認される（祇園甲、新橋）。当初島原統轄下にあり質低下あるも町衆支援により逐次向上。

江戸中期

祇園乙が認可される。甲乙間の利害が発生する。

明治中期

祇園甲、新開地が認可される。対抗意識の中にも新橋繁盛。新開地に近代企業の進出目立つ。

現在

花街衰退するも、祇園景観と祇園祭は市の顔として行事として保護継続される。

4．ルネッサンス

白川若衆（駐在武士）や維新の力は新橋を賑わす。維新後、この新風を若者と学生が受け継ぐ。

明治中期、新橋茶屋「大友」の磯田多佳らが醸す文芸気風に文人墨客、新町衆、学者らが集い、祇園の新文化が誕生する。

5．これからの祇園

本業衰退下、伝統景観の保持を市民は願うが、法規制や土地国有化の支援がどこまで支え切れるのであろうか。

[参考資料]

1) 中澤岩太と浅井忠

中澤は東大教授、京都工科大学（現在の京都大学工学部）学長を経て当時（明治35）創学の京都高等工芸（現在の工芸繊維大学）初代校長に就任する。

中澤は文部省留学生としてフランスに留学中の浅井忠を同校色染科教授に招聘する。浅井は専門の洋画以外に当時欧州に風靡したアールヌーボーの風潮や陶造形にも興味する近代感覚の芸術家であり、工芸を市民感覚や工学域に普及することを考える学究の人でもあった。中澤は茶屋「大友」の客であった。

2) 浅井忠と磯田多佳

内国博覧会協議に出席する黒田清輝を迎え中澤主催で祇園中村楼に宴を開く、浅井並びに高工各教授が列席する。中澤が呼んだ「大友」の藝妓 磯田多佳が一中節などの舞曲を披露し、浅井は心酔する。数年を経て妓籍を離れた多佳は浅井と九雲堂（八坂神社門前四条通り、現存）を営む。浅井は九雲堂工房に陶造形を憩い、これを高工の師弟や友陶会の友が扶け、多佳が店頭で売った。当時「鷹狩する武士」（現在工織大保存）の創作に苦悩する浅井は九雲堂工房にその疲れを癒したと伝えられている。浅井は明治40年急逝、傷心の多佳女は九雲堂を兄に譲り「大友」に戻る。

多佳は新橋茶屋「大友」の次女（明治12年生れ）父は元田辺藩士、姉は一力女将、才気深い瞳と舞曲が輝いていた。読書と詩歌を通じて育った人柄が文芸茶屋を創りあげた。多佳は昭和20年終戦前に亡くなるが終生、多くの文人墨客や学者、町衆と交わりのなかに、また浅井や多佳を慕った学生や若衆との暖かい交流があった。

3) 多佳女追善に集う人たち

多佳女のS21とS32の追善供養は養嫡子磯田又一郎（洋画）加賀正太郎（財界）谷崎潤一郎夫妻（文人）金子竹次郎（染織試験場？）坂部三次（ニック創業者、京都織物？）及び祇園関係者の尽力により挙行、多くの祇園関係者、町衆、学者、文人墨客が参列した。西陣、室町、染織関係者の列席も多かった。（芳名録記載は氏名のみ、職業など不詳）特記として杉本忠三氏の列席が目立つ、氏は明治43年京都高工（色染科）卒 杉本練染（株）専務であり。また永年に亘り同校の同窓会長を務めた。多くの同校関係者が多佳を慕っていたことを推察する。

筆者の父も祇園の灯油屋に生まれ、幼児の頃は近隣の多佳女や雪女（モルガンお雪）に子守られて育った。父とは折りに触れて路上などに語り合う人達でもあった。

多佳女は有名なる知識人、文化人との交流に依って祇園復興の人と迄云われ、かにかくに祭りの祭神の如くに語られる人となったが、浅井忠との秘かな愛に生き、また関わる染織業界の町衆や学生たちに慕われる人柄こそが多佳の本来の姿であろう、こんな思いに駆られながら此処に記す。

4) 祇園に育てられた学生たち

祇園は若者衆や学生達を大事にする伝統的な気風があった。

「宮さん宮さんおん馬の前にひらひらするのはなんじゃいな...」

戊辰の戦いに向かう武士の胸に飾られた布きれは実は祇園の芸妓が自らの帯の端を裂き、武運を願って贈ったものである。

明石国助（京都高工 明治42色染科卒）は戦後母校に講義する時、当時の学生が舞妓達と待ち合わせする縄手通大和橋東南の喫茶店「らんでんぼう」（ランデブーの模語）がまた高工生の溜まり場であることを語られた。店名は変わっていたが最近までは存続していた。当時 白川を経て祇園入する諸学校（高工の他に三高、京大、美専）も同様な溜まり場があったと聞く。また当時この地に関わる有名人やそのロマンスもまた多い。

池田勇人、森光子（愛の結晶）川上（お雪恋人）寒川（詩人）藤喜久（近衛公側室）

.....

5) 新橋に遊んだ人達

茶屋 「大友」(多佳追善供養芳名記載を含む)

文人 谷崎潤一郎夫妻 吉井勇 夏目漱石 高浜虚子 与謝野鉄幹 尾崎紅葉
幸田露伴 長田幹彦 池部義象 ...

墨客 浅井忠 梅原竜三郎 安井曾太郎 横山大観 竹内栖鳳 黒田 小野竹喬
岡本橋仙 ...

学者 中澤岩太 浅井忠 厨川白村 上田敏 湯川玄洋 ...

他 坂東三津五郎 簀助 片山春子 西川貞三郎 田中緑紅 茂山 大津(銀閣
寺)中川(角屋)

町衆 芳名録記載数十名(大半が室町、友禅関係者)大阪財界 加賀正太郎 岸本
左衛門 ... 京都染色界 坂部三次 杉本忠三 金子竹次郎 ...

他の茶屋

政治思想 河上肇 近衛秀麿 西田幾太郎 倉田百三 西尾末広 ...

維新の白川衆(武士) 越前 加賀 彦根 会津各藩士 及び諸藩士

6) 磯田多佳に絡む諸詩

かにかくに祇園は恋し寝るときも枕のしたを水の流るゝ(白川の碑) 吉井勇
紫陽花の花に心を残しけん人のゆくへも白川の水 谷崎潤一郎
春の川を隔てゝ男女かな (木屋町御池鴨川辺の碑) 夏目漱石
うすものや河原つたひの草しめり 磯田たか

(色染 昭28・西川 三郎)